

## 研究ノート

### 〈夜景画〉の誕生 — 北斎から広重へ

舟橋 萌絵\*

#### 序

江戸時代後期の浮世絵師、葛飾北斎（1760〔宝暦10〕年～1849〔嘉永2〕年）は、代表作「富嶽三十六景」などの風景画をはじめとして、役者絵、美人画、花鳥画、風俗画、絵手本<sup>(1)</sup>など多くの題材に目を向けて、狩野派・琳派・洋風画の画法を広く学び、様々な作品を完成させた。

浮世絵のジャンルとしての「風景画」を確立したのは北斎であると言われている<sup>(2)</sup>。北斎からやや遅れて浮世絵師として活躍し、やはり「風景画」を多く遺した歌川広重（1797〔寛政9〕年～1858〔安政5〕年）は、明け方や、朝、昼の日中の作品を多く描いた北斎とは対照的に、「夜景」を多く描いている（図①）（図②）。朝と昼の作品も惜しみなく描いてはいるが、さらに多量に、夜の風景を描いていた。広重は、北斎同様「風景画」を確立した浮世絵師として知られている。その「風景画」によって一躍有名となった広重が、どの絵師よりも、長い年月をかけて手掛けた作品は「夜景」の作品である。夜景の作品だけでも、およそ100点を超える。「夜景」が、これだけ数多く描かれていることを考えると、広重の「夜景」に対する思いは非常に強く、「夜景」の様相を正確に描き出すことに力を注いだのであろうかと考えられる。

これまで日本美術史において、景色を描いている絵画のことは「風景画」と総称されてきた。広重がこれほど多様に描いた「夜景」の作品を見て、筆者は、広重の描いた「夜景」について夜の風景という概念から「風景画」の部門の中に新たに「夜景画」というカテゴリーを作りたいと考えた。広重が「夜景」を描いた作品を、筆者は「夜景画」という、1つのカテゴリーとして呼ぶことにする。筆者が考える「夜景画」とは、名称の通り、夜の景色を主体として描いた風景画のことをいう。まさに、広重の描いた夜景が「夜景画」といえるのである。夜景を主体とした風景画であり、広重の作品のように、

\* 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻研究生

実際にある風景を描いたものを「夜景画」とあらわす。空を暗い色で表現し、星や月の明かりを配し、その中に浮かび出る山や海、神社などの情景を描いた作品が「夜景画」である。広重は、夜の景色を描写し、山や海などの「夜景」を主体とした実景を描いたのである。

北斎は、夜の作品を1点描いてはいるものの、その1点は、人物が主体となっており、そこに添えられた背景が、「夜」ということだけになっている（図③）。しかし、広重の作品は、人物ではなく、「夜の風景」を主題として描き、正に「風景画」といえる「自然の情景」を描いているのである。人物は小さく描き、風物に溶け込ませて、意とする夜の景色を主題にした「風景画」は、広重に始まると言って過言ではない。

広重は他の絵師が描いていない、夜の景色そのものの美しさを描いた。夜の雪や、夜の雨など、夜の情景を美しく描いた。広重以外の絵師は、夜を背景とした作品を描いても、どれも人物や動物（男性や、女性、子供、擬人化された動物など）が画面に大きく、中心に描かれている。どこまでも人物が主体であり、「夜の情景」を描こうという意欲は感じられない。（図④）（図⑤）（図⑥）（図⑦）（図⑧）（図⑨）。「夜景の美」を見出し、「夜景」を絵の主体としたのは、まさに広重なのだ。

本稿では、広重が描いた「夜景画」に着目をし、広重が強い思い入れを持ち、好んで多く描いた「夜景」の作品についての考察を試みる。広重の作品には、如何なる「夜景画」の表現があるのか、どのような作品に「夜景画」が描かれているのか、なぜ、広重は「夜景」にこだわったのか、広重が「夜景画」に込めた思いは何であったのかといった点をめぐって、その一端を論じていくことにする。

## 第1章 北斎と広重の「風景画」一日光と夜光

### 1. 「風景画」

「風景画」は、江戸時代に多く描かれた。「風景画」という名称も、江戸時代中期に誕生した名である。北斎と広重が、景色を描いた作品を描いてからである。「風景画」と称される以前は、日本各地を描いたものを多くは、名所絵<sup>(3)</sup>と呼んでいた。諸国の名所を描いた名所絵は、平安・鎌倉時代に絵巻物に描かれ、18世紀中期ごろには、透視図法を用いた「浮絵」にも、描かれた。しかし、「美人画」や「役者絵」が主流の世であり、名所絵を構成する際に中心となるものは、その場の景色よりも、植物や、男性、女性など主に人物を主題としたものであった（図⑩）。

「風景画」は、名前の通り、風景を描いた作品であり、そこに人物を登場させて描い

たとしても、風景を主体として描いた作品のことである。「風景画」と呼ばれる作品は、「景色」だけの作品、もしくは、「景色」が主体となっている作品なのである。北斎の描く「富嶽三十六景」の「風景画」や、広重の「東海道五十三次」、「東都名所」「名所江戸百景」の「風景画」は、まさしく、「景色」を主とした作品だけである。

「景色」を描いた作品というと、近世初期に描かれた、「洛中洛外図屏風（図⑪）」や、東洋絵画のジャンルである「山水画<sup>(4)</sup>（図⑫）」もあるが、これは、はたして「風景画」と呼べるのであろうか。

「洛中洛外図屏風」を見てみると、庶民や動物など、生物も共にたくさん描かれており、「景色」を描いているように見えない作品であり、「景色」の描写とは程遠いように感じる。また「洛中洛外図屏風」の画中には、平安時代の「源氏物語絵巻」などの絵巻物にも表された、金色の雲を描き、作者が、上から見下ろして描いたような構図となっている。「景色」を主体として描いた作品、もしくは、実際の景色を描くのであれば、このような構図の作品は描かれないように思われる。この作品は、「景色」を描いたというよりも、作者の考える想像表象の像であり、作者の思考も含まれているのではないかと思われる。北斎や、広重が描いた作品では、人物や動物が描かれていたとしても「景色」を描く際、実景を常に描いているのも特徴である。目で見たものをそのまま、描き表すのも「景色」を描く「風景画」の大きな点であると合点される。

「山水画」においても、実景は描かれておらず架空の景色となっている。「山水画」には山が多く描かれており、その山は、いくつか山塊が固まっているように描かれている。それらは明確に区分けされておらず、山容の描き方が、全体的に簡潔である。山水画の絵師、雪舟は、様々な景色の作品を描いている。それぞれ景色が異なる構図であっても、山頂部分に、木々を組み合わせて描く描き方が、共通しているのも目立つ。こういった点も、実景を描いているように見えない。そのため、「風景画」とは言えないようと思われる。

北斎と広重は、「風景」と呼べるものを、的確に描いた。「風景画」と成る作品を描いたのである。このようなことからして、北斎と広重が描いた作品は、「景色の美」を描き表した「風景画」であるといえる。

また、「風景画」といったジャンル名が誕生したのは、北斎と、広重がそれぞれ、「背景」を主体とした作品を、描いた時からである。「風景画」というジャンル名や、「景色の美しさ」を絵で表現し、確かな「風景画」そのものを確立させたのは、紛れもなく、北斎と広重兩人である。それぞれが「富嶽三十六景」と「東都名所」を発表した、1831年（天保2年）という年は、その意味でも、日本において風景版画の誕生した、記念す

べき年にあたるのである。

## 2. 広重の「風景画」

広重は、正確な透視図法や、新たに修めた、都の新しい画派である円山四条派の写生画風を、積極的に取り入れ、広重独特の風情のある画風を組み立てていった。刺激の少ない、温雅な画趣の広重の作風は、長きにわたり、多くの人々に親しまれた。

北斎と広重には、「風景画」の描き表し方に、大きな違いがあった。

北斎が、朝や日中の背景の「風景画」を多く描いていたのに対し、広重は、「風景画」を描く際、長きにわたり、「夜の情景」を非常に多く描いたのである。全く以て正反対の構図となっている。

赤瀬川原平『赤瀬川原平の名画探険 広重ベスト百景』は、広重は「夜景」を好み、また、雪月花や、雨など、気象現象を表すのを、得意としていたと述べている<sup>(5)</sup>。

広重の代表作「東海道五十三次」や、「名所江戸百景」の「風景画」には、多くの「夜景」を、星や月、時には、山の姿と共に描き表している。人物はあえて小さく描き、風景、「夜景」そのものの怪しさや、不思議な美を、見事に表現した。北斎は描いていない、「夜景の美」を見出したのである。

また、この北斎と広重の、朝と夜といった、対照的な構図が描かれた理由には、広重の意図的な思いが込められているように、思われる。赤瀬川原平は、「赤瀬川原平の名画探険 広重ベスト百景」の中で、北斎と広重は、偶然に一度、会ったことがあり、広重は、大先輩である北斎の「風景画」に影響を受けていたことを挙げている。北斎と広重は、38歳差あるものの、互いに人物画よりも、あえて「風景画」に力を注ぐものとして、認め合うこともあったのと同時に広重は、北斎をライバル視していたことも、同書に述べられている。こういったことから、広重は、ライバル視していた北斎の画風とは、あえて対照的な作品を描きたいと考え、北斎にはない、北斎が描いていない「夜景画」を描写したのであろうとも、考えられる。

また、北斎と広重は、様々な景色を描いてきた。その中で、同じ場所の、同じ背景を、朝と夜とで描き表した作品も存在する。それが、浮世絵版画「八景シリーズ 金沢八景」である。

北斎の「金沢八景」(図⑬)は、日中の様子を描いている。横九切版という小さな八景図で、遠近法を用いた洋風画であり、空には狂歌三首が書かれている。江ノ島、鎌倉との三枚組で、「摺物」と呼ぶ特別注文品の一図で、一般の浮世絵と異なり、この場合は狂歌を詠んだ人々がお金を出して作らせたので「狂歌摺物」である。画中右上にひらがな

で「ほくさいうつす」とサインのように書かれていることから、北斎の作品と見て取れる。

絵の中心に二つ橋になっている瀬戸橋が描かれ、その先に瀬戸明神の森と鳥居が見える。右手に見える小島は、照手姫で有名な姫小島であろうと思われる島が描かれている。

しかし、瀬戸橋の向こうに琵琶島弁天が見え、琵琶島弁天を描いているのかもしれない。鳥帽子岩も見える一方、夏島が見つからない。実景とは少し異なる景色である。しかし、狂歌に「金沢八景」「瀬戸の明神」と詠われていることから、金沢八景図と考えることが出来る。

広重の「金沢八景」(図⑭)を見てみると、北斎とは異なり、夜の描写となっている。1853(嘉永6)年5月から6月にかけて、友人と共に江戸から箱根までを遊山に出かけた際に、美しい景観を描いたとされ、その一つが、「武陽金沢八景夜景」である。金沢八景の夜景を描き、月明かりに浮かび上がる景勝を書き表した。<sup>しらすづけ</sup>写真をなした、広重の好個の作品である。

同じ景色を描いても、広重は「夜景」を描いている。やはり広重は、「夜景」を好み、「夜景」を特別視していたことが解かる。

## 第2章 広重の「夜景」への思い

### 1. 確立した「夜景画」 — 夜景の美

広重は、「夜景」を主体とした作品を多く、描いていった。夜景の「風景画」は、まさに広重が最初であり、広重だけといつても過言ではない。

広重が「風景画」において、「夜景画」を確立したのである。

もともと、広重よりも、夜景を背景とした作品を、鈴木春信や、歌川派の歌川国貞、歌川国芳、歌川国輝、喜多川歌麿など、他の絵師も描いてはいる(図⑮)(図⑯)(図⑰)(図⑱)(図⑲)(図⑳)。

しかし、こうした絵師たちは、夜景を背景とした作品を描いても、「美人画」として作品を描き、女性や、人々を主体として描いているため、「風景画」、「夜景画」とは言えない。鈴木春信の「夜の梅」(図⑯)においては、女性を主体として描くとともに、平安時代前期の歌人凡河内躬恒の詠んだ、古今和歌集の和歌をもとに、描いている作品とも考えられる<sup>(6)</sup>。春の夜を、擬人化させて、女性と梅の色香を詠んだ歌で、その歌に沿って、「夜の梅」という「美人画」を表したのだと思われる。和歌を題材に、女性を中心に描き、背景として夜を描いただけである。このように、広重以外の絵師たちは、人物が主

体であり、夜景は背景として、添えられた形として、描いている。

以上の事からすると、広重以外の絵師は、「夜景」や「夜色」の、美しさを、描いておらず、夜の景色を描きたいわけではないと考えることが出来る。

一方広重は、「夜景」を描く時も、夜景、風景そのものを、描いている。北斎や、他の絵師とは異なり、広重は人物を小さく描いており、風景を中心にして、描いている。「風景画」「夜景画」と誰もが見て、はつきりと解かる作品である（図②）（図③）。

「夜景の美しさ」を描いたのも、夜間の情趣を表現し、発見したのも、広重が最初であり、広重が、「夜景の美」を見出したのである。

また「夜景」を描く際、広重は、画中の上半分を黒色や藍色、グレーの暗い色で表し、時には、画中の上の部分に、線上で、暗い色（黒やグレー）を描き、夜の空や夜景を表している。夜や「夜景」を表す色には、多く、暗い色が使われる。極めて一般的に、夜をイメージする時、光がなくて暗い黒のように黒い色や、墨のようなくすんだ色を思い浮かべる。まさに、夜を表した色で、広重は、見事に夜を表現しているのである。

夜を表していると思われる広重の作品には、画の上半分、もしくは画の上の部分に、夜の象徴といえる、夜を表した、暗い色を使用している。これも、広重が初であり、広重ならではの発想とでもいえよう。

## 2. 広重の「夜景」の神秘と雪と月

広重は、「風景画」として、多くの「夜景画」を描き表した。ここからは、広重が描いた、「夜景」の特徴を見ていく。

1831年～1834年の天保期（天保2～5年）に描いた「東海道五十三次」や、「江戸近郊八景」晩年に描いた「名所江戸百景」等の中に、「夜景」の特徴が表されている。広重が「風景画」を描き始めた天保期（34～37歳）において、既に「夜景画」を描いており、その後とどまることなく、晩年においても「夜景画」を描き続けた。

広重の「風景画」を見てみると、そのほとんどが、月夜（主に満月）や、暗い夜に映える、白い雪、星空を描き、「夜景」を表現していることが解かる。その他に、夏の風物である花火、冬の夜の雪、夜の山々、夜の雨の中、雪夜の富士山、灰色や薄墨、黒色で塗り表した山々、夕刻の賑わい、吉原の遊郭等といった、「夜景」の様子を描いた。

このように見てみると、広重の描く「夜景」の絵は、様々な夜色で、長きにわたって描き続けられていたことが解かる。「夜景画」は、肉筆画や、挿絵、草双紙<sup>(7)</sup>、絵本を含めると、約100点以上にもなる。広重の「夜景画」についての詳細は下記に表Iでまとめた。

(表 I)歌川広重の「夜景画」(年代順・「夜景」の特徴等をジャンル別)

場所と年代 作品名を含む	生物の有無	「夜景」 特徴・場面	作品名
江戸 1831-1834 (34-37歳)  「東海道五十三次」 「東海道」(1842(45歳)) 「東海道」(1847(50歳))	・有 (人物は、景色より、小さく描写。)	・夜の雪(空は暗く描写。) ・夜の富士山(雪の富士で表現。) ・夜の雨	「東都名所」シリーズ ・「東都名所 日本橋雪」(図①) ・「東都名所 浅草金竜山下東橋雨中望」 ・「東都名所 浅草金竜山年ノ市」(図②)
東海道の宿場 52、 日本橋、京都 1831-1834 (34-37歳)	・有 (人物は、景色より、小さく描写。)	・月(満月) ・夜の雪(空は暗く描写。)	「東海道五十三次」シリーズ ・「東海道五十三次之内 蒲原 夜の雪」(図③) ・「東海道五十三次之内 沼津 黄昏図」 ・「東海道五十三次之内 赤坂」(行書版) ・「東海道五十三次之内 石薬師」(行書版)(図④) ・「東海道五十三次之内 鞠子」(隸書版) ・「東海道五十三次之内 藤枝」(図⑤)(隸書版) ・「東海道五十三次之内 関」(図⑥) ・「東海道五十三次之内 浜松」(隸書版)
京都 1834 (37歳)	・有 (人物は、景色より、小さく描写。)	・月(満月) ・夜の雪(空は暗く描写。)	「京都名所」シリーズ ・「京都名所之内 祇園社雪中」(図⑦) ・「京都名所之内 淀川」

琵琶湖南西部、八 勝景 1834年 (37歳)	・無	・月（満月） ・夜の山 ・夜の雨 ・神社 ・夜の雪	「近江八景」シリーズ ・「近江八景 石山秋月 石山寺」 ・「近江八景 唐崎夜雨 唐崎神社」 ・「近江八景 比良暮雪 比良山系」
江戸、京都、三条 大橋を結ぶ中山道 の宿場 70 の宿場 1835-1842 (38-46歳)	・有  (人物は、後ろ姿で、景色より、小さく描写。)	・夜の雪  ・月（満月）	「木曾海道六拾九次」シリーズ ・「木曾海道六拾九次之内 大井」 ・「木曾海道六拾九次之内 長久保」 (図⑥) ・「木曾海道六拾九次之内 望月」
現在の、神奈川県 横浜市金沢区の内 川入江の周辺一帯 1835年 (38歳)	・有  (人物は、後ろ姿で、景色よりも、小さく描写。) ・無	・月（満月） ・夜の雨 ・夜の雪	「金沢八景」シリーズ ・「金沢八景之内 濱戸秋月」(図①) ・「金沢八景之内 小泉夜雨」 ・「金沢八景之内 内川暮雪」
江戸に近い場所 1838 (41歳)	・有  (人物は、景色より、小さく描写。)	・夜の雨(空は暗く描写。) ・夜の雪(空は暗く描写。)	「江戸近郊八景」シリーズ ・「江戸近郊八景之内 吾嬬杜夜雨」 ・「江戸近郊八景之内 飛鳥山暮雪」
江戸 1840 (43歳)	・有  (人物は、景色より、小さく描写。)	・夜の海 ・夏の夜 ・花火	「新選江戸名所」シリーズ ・「新選江戸名所 兩国納涼花火ノ 図」
掛物絵 <sup>(8)</sup> として、 「風景画」を描く。 1842年 (45歳)	・有  (人物は、景色より、小さく描写。)	・月（満月）	・「甲陽猿橋之図」

東北から九州 1853-1856 (56-59歳)	・有 (人物は、景色 より、小さく描 写。)	・夜の雪(空は暗く描写。)  	「六十余州名所図会」シリーズ ・「江戸 浅草市」
江戸 1856-1859 (59-62歳)	・有 (人物は、景色 より、小さく描 写。)  (一部の作品 で、人物や、犬、 鳥は、手前に、 やや大きめに 描き、景色との 遠近感を表 現。)	・夜の雨(空は暗く描写。) ・夜の雪 ・夜空 ・月(三日月) ・月(半月) ・月(満月) ・夜の海 ・夜の川 ・夏の夜 ・花火 ・星空	「名所江戸百景」シリーズ ・「昌平橋聖堂神田川」 ・「永代橋佃しま」(図②) ・「京橋竹がし」 ・「両国花火」 ・「虎の門外あふひ坂」(図⑩) ・「愛宕下藪小路」 ・「猿わか町よるの景」 ・「廓中東雲」 ・「浅草金竜山」 ・「真乳山山谷堀夜景」 ・「浅草川首尾の松御厩河岸」 ・「駒形堂吾嬬橋」 ・「深川木場」 ・「深川洲崎十万坪」 ・「目黒太鼓橋夕日の岡」 ・「王子装束ゑの木大晦日の狐火」 ・「赤坂桐畠雨中夕けい」 ・「びくにはし雪中」
江戸 制作年代不明	・無	・夜の雪	「源氏絵 江戸十二景」シリーズ ・「不忍暮雪」
江戸 制作年代不明	・有 (人物は、景色 より、小さく描 写。)	・夜の雪 ・月(半月)	「銀世界東十二景」シリーズ ・「浅草金竜山朝の雪」 ・「亀戸天満宮境内一覽」 ・「真崎の大雪」 ・「隅田川両川岸一目の月」(図⑨)

表Ⅰから分かるように、広重はどの「風景画」シリーズにおいても、必ずや「夜景」を描いている。

どの作品も、情緒豊かに描いており、線と色で、夜の空気の感触を見事に実感させてくれる。

描かれる人々の様子は、他の絵師が描く人たちとは異なり、寡黙に、多くは、後ろ姿で描かれ、正に、人物は、景色の一部となって描写されている。時に、人物や鳥を手前に描いて、遠近法を活用し、景色を際立たせている作品も存在する。やはり広重は、「夜景」を、主として描いているのである。

その「夜景画」の中でも、一際目立つのは、夜に雪が降る様子の描写である。「東海道五十三次」や「名所江戸百景」にも夜の雪が多く描かれ、シリーズの一つである「銀世界東十二景」においては、題目にも銀世界（雪）を題するほど、夜の雪に、こだわり、夜の雪の景色をテーマとして、「夜景」を銀世界と共に描くほどまでに、夜の雪を意識していたことが伺える。

また、風景画家として一躍有名となり、34歳の若さで、見事に描き表した「東都名所」シリーズの、「日本橋雪（図②）」にもあるように、富士山は雪に積もった姿で、美しく表現されている。

「夜景の美しさ」を描いたのは、広重だけであるということを、本稿において、何度か論じてきている。さらに、付け加えると、「夜の富士山」を描き表したのも、紛れもなく、広重だけなのである。「夜の富士山」を雪で表現したのである。夜は、暗い。江戸時代は、現代のように、夜に、しかも外に電灯や、明かりというものはなく、月の光か、提灯だけであった。そのような、暗闇ともいえる景色の中で、富士山を描くことは、困難であったと思われる。しかし、広重は、夜の富士山に、あえて挑戦し、白い雪という、夜の暗闇にも映える「雪の富士山」を、美しく描き、夜の富士と「夜景」を見事に表現した。大量に積もる真っ白な、雪の富士を描くことで、より「夜景」の持つ美しさや、魅力を描きたかったように考えられる。

冬の雪と夜の組み合わせが多いのは、広重のお気に入りであるのと同時に、夜景をより一層、美しく魅せてくれるものであり、暗闇の中では、雪は、他のものに比べると、色が真っ白なため、描きやすかったのではないかと思う。

夜に映る雪明りは幻想的で美しく、雪は、「夜景」に挑戦したい、「夜景」が好きな広重にとって、ベストな組み合わせであったのだろう。

そして、夜の冬の寒さという、温度や空気の感触を、広重は「風景画」で、しかも「夜景」として、表現した初めての絵師であるともいえる。

その他に、広重が多く描いた「夜景画」の特徴は、月や、月に照らされた山や森、木々、海、川、神社、星である。

広重は、満月や、弦月、三日月など数多くの月夜の情景を、描いている。代表的なものには「東海道五十三次」や、「東都名所」などがある。

月の光に照らされた夜の景色は、正に趣があって、物語や詩、和歌を詠んでいるような、感覚を味わえる作風である。

このように、月とともに、夜の景色を表現している広重とは異なり、他の絵師の作品には、たとえ月が描かれしていても、風景ではなく、月を愛でている、人物（特に、男性の職人や、遊女などの女性）が主体で、描かれている（図⑯）（図㉑）（図㉒）。夜景の美しさではなく、月の美しさを眺めている人々が、表された構図なのである。月見は中国から伝来し、唐の時代にまでさかのぼる。それが平安時代、日本に伝わり、貴族たちの遊びとして定着した。池に船を浮かべ、水面に映る月を愛でて、詩歌を呼んだり、音楽を奏でたりして、月を楽しんでいた。月を見る行事として、一般庶民にも広まったのは江戸時代からであり、江戸時代には、月を見て楽しむ、仲秋の名月を表した作品が多く出版された。それらは全て、仲秋の名月をテーマとして、人物と満月を描いており、「夜景」を描く目的で表現されていないように思われる。

時は溯り、12世紀前半の絵巻物にも、すでに、夜を背景に、満月が描かれた作品は存在し、藤原隆能の「源氏物語絵巻」や、土佐光起の『源氏物語画帖』、「竹取物語」、「月次絵」等に描かれた。この絵巻物や画帖においても、風景ではなく、月を愛でる人物が主として、描かれている（図㉓）（図㉔）。やはり、広重は月と共に、「夜景」を表現し、「夜の美しさ」を描いている唯一の絵師であると言えよう。

また、広重以外の絵師は、月を満月で描いている。人物ではなく、情景を重視して描く広重は、満月も半月も三日月も、描いている。写実的な画風を描きたい広重の、「風景画」に対する思いが、満月だけにはとどまらず、半月や、三日月をも、描いているのであると思われる。また「夜景」を好んだ広重であるからこそ、「夜景」に美しく映える、星や満月の他に、半月（上弦の月）や、三日月といった月の満ち欠けも、描きたかったのではないだろうか（図㉕）、（図㉖）、（図㉗）。

広重は、まさに自然の美や景観を「夜景画」で表現したのだ。

月は古来自然を代表するものの一つとされ、平安時代から、掛け軸などに、月光と鳥（主に雁）という組み合わせで、描かれる作品も、いくつか存在する（図㉘）（図㉙）。これは、「古今和歌集」等の和歌で詠まれることの多い、月と雁を基に、描かれたとされている。

月光を描き、鳥が巣に帰る光景を描いていて、掛け軸、書画も描かれているが、これは「夜景」を描いているのではないように思われる。正しく「夜空」の光景を描いているのである。

古代から月は「夜空」の主点である。「夜空」を描いている作品は、詩歌を詠む主題、題材であり、月や風を描いて詩歌や掛絵を作っているのである。

「夜景」とは、夜の風景、景色を主題とした絵画である。星や、暗闇と共に、山や海などの景色を描き、月と共に「夜の景色」を描いている、広重の作品は、正に「夜景画」といえる作品なのである。

確かに、月明かりと鳥は、夜をイメージさせるものではある。しかし、月と鳥を描いているだけでは、「夜景」とは言えないよう思える。事実、実景を描き、「夜景」といえる、夜の景色を描いた広重も、他のジャンルでは「花鳥画」として、「月と雁」(図⑩)や、夜の月と鳥と波の一部だけを描写した「波に千鳥」を描いており、何としても、「夜の景色」(夜景)とは、程遠いものを描いている。他の絵師も、「美人画」の中に月と雁を描いているが、女性に焦点が合う構図で表現され、女性を主として描いており、風景を主題にした「夜景」とは言えないよう思われる。以上の事からしても、必ずしも、月と鳥(雁)だけでは、「夜景」とは、言い表せないように思われる。

改めて、表Ⅰや図を、順に調べていくと、広重の「夜景画」には、年代ごと特徴も見られる。「東海道五十三次」シリーズを描いた1831年から1834年、広重が34歳から37歳の、図②「東海道五十三次之内 関」以前の作品では、人物は小さく、下向き加減で、背中を丸くさせ、後ろ向きであり、正面を向いた作風であっても、顔がはっきり描かれていないのが多い(図②)(図③)(図④)。風景画の中に、人物も一体となり、背景の一つとなっている。

しかし、1834年広重37歳「京都名所」からの作品は、夜景をイメージさせる藍色などが使われているものの、色彩も明るく、鮮やかになっているのが見て取れる。景色を主体として描いているのは、変わりはないが、そこに小さく描かれている人物たちにも、変化がみられる。人物の身振りが明るくなり、前や上を向いており、表情も活気にあふれていて、動作が生き生きしている(図⑤)(図⑥)。明らかに変化がうかがえる。

この広重の作風に変化がみられる37歳の頃は、ちょうど広重が、御馬献上の行列に同行し、旅をした時期である。この頃は、「東海道五十三次」シリーズも完成し、人気を博して、評判を得た時期でもある。世の中多くの人から評判を得て、広重は自分の作品に自信を持ち、旅をすることによって、広重の展望が大きく広がったのではないかと思う。37歳からの作品には、その自信が、活力にあふれた生き生きとした描写として、表

されていったのではないだろうか。また、この頃は北斎の「富嶽三十六景」が人気を博した時期と重なる。絵師として、北斎と広重は、お互いを刺激し合う関係であったからこそ、北斎の楽しく、活気にあふれた作風の影響も、受けたのではないかとも思われる。

### 3. 「夜景画」に込めた思い

広重は、「夜景」が好きである。広重が作り出したと言える、夜の景色を描いた「夜景画」には、他の絵師はない、様々な夜の表情がある。

あたりが静まり返り、明かりのない暗闇に、星がちらちら瞬く。月の光に照らされた、山や木々、神社仏閣や、屋台、茶屋などの建物に、夜の心象が、リアルに表現されている。「夜景画」に登場する人々までも、夜の景色の一体としてしまう、広重の「風景画」の力は、見事である。

透視図法や円山四条派の写生画を重視し、風景の中に広重の「夜の美」への熱き思いを描き、繊細で、謹厳な画風を描いている。

「夜景画」の中には、雪を表現している作品も多い。「夜景」が雪を引き立たせ、さらに雪も「夜景」を引き立せている。木々や松の枝、山に積もった雪の、静かに、しんしんと降り積もる詩情溢れる作品は、正に、広重の得意とした表現である。

「夜景と雪」という組み合わせは、夜景を好み、雪の表現を得意とした広重にとって、必要不可欠な組み合わせであったのだと思われる。

広重は、他の絵師が描いていない、雪の真っ白さと「夜景」の暗闇といったコントラストを、あえて作り出すことによって、新たな挑戦をしようとしていたことが伺える。

広重の作品には、雨の作品も多い。広重ほど雨を描いた絵師も、「夜景」と雨を組み合わせて描き表した絵師も、見当たらない。ここからも、広重の「夜景」に対する強い思いや、新たな画題に挑戦し、成し遂げる意志の強さを、感じることが出来よう。

北斎は、雪景色や雨を描いた作品を、ほとんど描いていない。もちろん「夜景」や夜を背景として、雪や雨を描写した作品は、1点も見当たらない。新たなものに挑戦することに意欲を見出そうとしている広重であるからこそ、大先輩である北斎までもが描いていない画題を、描きたい思いもあったのではないか。北斎72歳、広重35歳、この頃に、北斎は「富嶽三十六景」を刊行して人気を博していたころである。革新的な北斎の浮世絵の世界に、大きな衝撃を受けた広重は、新たな「風景画」の境地を模索し、北斎の描いていない「夜の風景画」や、「夜の雪」「夜の雨」の風景を重視し、数多く描き上げていったのだと思われる。その2年後に、広重は「東都名所」で、「夜景画」を描いていくことになる。広重にとって「夜景」は、「美」そのものであり「挑戦」でもあった

のだと、考えられる。広重の「夜景画」は、正に広重の望みが、強く表出された作品だと思う。

### 結 「風景画」の北斎から「夜景画」の広重へ

葛飾北斎、歌川広重の二大浮世絵師は、江戸時代から現代に至るまで、絵画、工芸、建築、音楽、デザイン、漫画、様々な分野に、多大な影響を及ぼした。北斎と、北斎と同じ天才的な鋭い感性と、堅実な目を持ち、詩情あふれる「風景画」、「花鳥画」、自然を描いた歌川広重。北斎が、朝や日中の様々な「風景画」で脚光を浴び、広重は、新たなジャンル「夜景」の作品を確立し、人々に衝撃を与えた。

北斎が描いた明け方や、朝、日中の「風景画」とは対照的に、広重は「夜」という時間帯に着目し、夕闇や夜間の「夜景画」を一貫して描いた。広重の描く「夜景」は、これまでのように単なる背景として描かれたのではない。それは、それ自体のもつ美によって、主題に躍り出た「夜景」である。まさに広重によって、「夜景画」が創造されたのである。

広重ほど、「夜景」にこだわりをもって、多量に、長年「夜景画」を描き続けた絵師は、他にはいない。正に、広重は、日本美術において、実景を描き、風景を主体とした「夜景」を描いた初めての絵師である。

### 参考文献

- ・永田生慈『北斎クローズアップ』東京美術、2015年。
- ・永田生慈『もっと知りたい葛飾北斎 生涯と作品』東京美術、2005年。
- ・一般財団法人北斎館『北斎館肉筆画大図鑑』、2015年。
- ・福田アジオ『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館、1999年。
- ・日下部行洋『北斎 富嶽三十六景の旅』平凡社、2010年。
- ・大久保純一『広重の浮世絵風景画』東京大学出版会、2007年。
- ・小野寺優『歌川広重 日本の原風景を描いた俊才絵師』河出書房新社、2017年。
- ・内藤正人『もっと知りたい歌川広重 生涯と作品』東京美術、2007年。
- ・赤瀬川原平『赤瀬川原平の名画探険 広重ベスト百景』講談社、2000年。
- ・奥村恆哉『新潮日本古典集成（第19回）古今和歌集』新潮社、1978年。

## 図版出典

- ・一般財団法人北斎館『北斎館肉筆画大図鑑』、2015年。
- ・永田生慈『北斎クローズアップ』東京美術、2015年。
- ・小野寺優『歌川広重 日本の原風景を描いた俊才絵師』河出書房新社、2017年。

## 図版



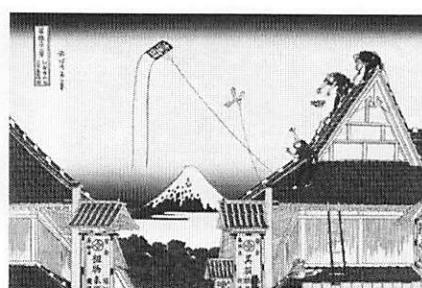
(図①)



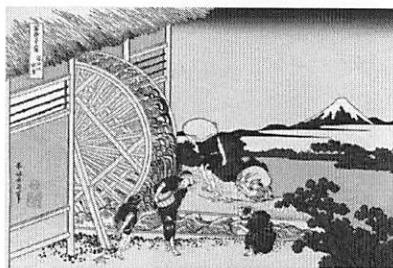
(図②)



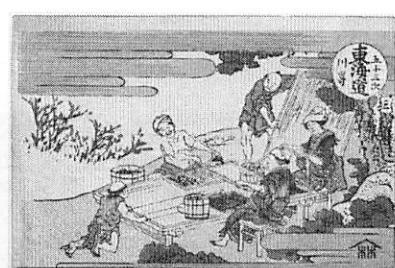
(図③)



(図④)



(図⑤)



(図⑥)



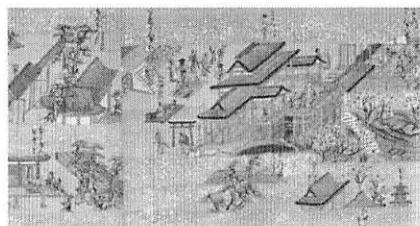
(図⑦)



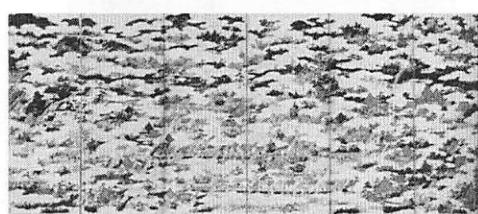
(図⑧)



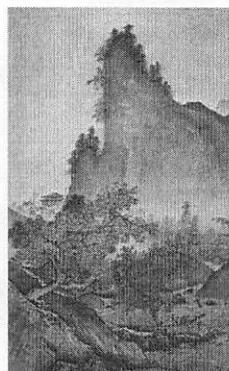
(図⑨)



(図⑩)



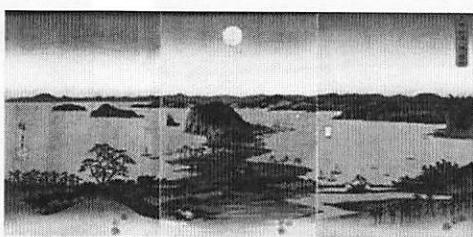
(図⑪)



(図⑫)



(図⑬)



(図⑭)



(図⑮)



(図⑯)



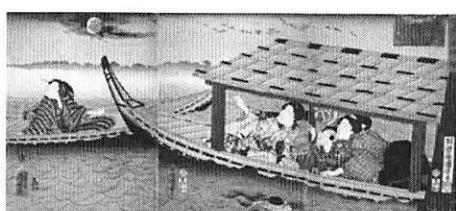
(図⑰)



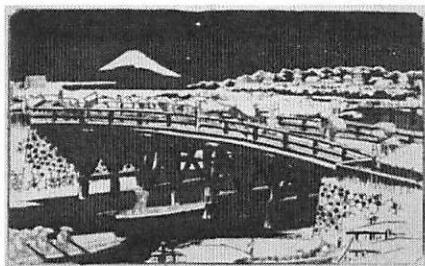
(図⑱)



(図⑲)



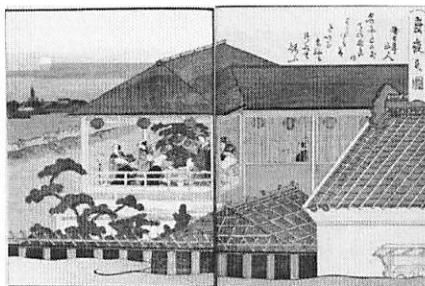
(図⑳)



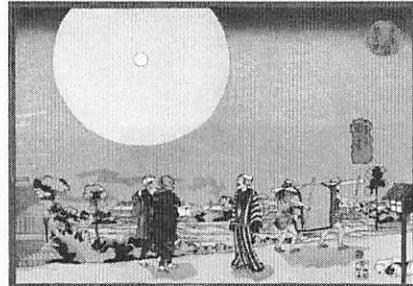
(図②1)



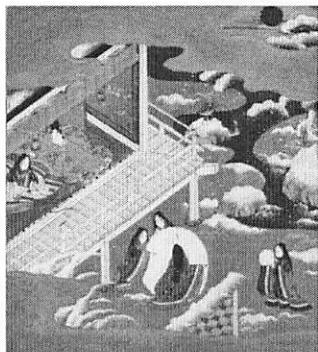
(図②2)



(図②3)



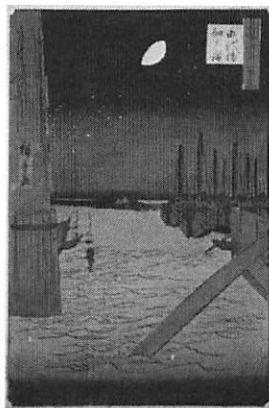
(図②4)



(図②5)



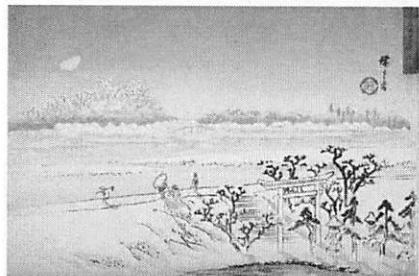
(図②6)



(図27)



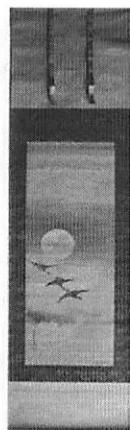
(図28)



(図29)



(図30)



(図31)



(図32)



(図③)



(図④)



(図⑤)



(図⑥)

## 図版一覧

- (図①) 歌川広重「金沢八景之内 濑戸秋月」1835年 神奈川県立金沢文庫所蔵  
(図②) 歌川広重「東都名所 浅草金竜山年ノ市」1831-1834年 江戸東京博物館所蔵  
(図③) 葛飾北斎「千絵の海 甲州火振」1833年 東京国立博物館所蔵  
(図④) 葛飾北斎「富嶽三十六景 江都駿河町三井見世略図」1831-1833年 東京国立博物館所蔵  
(図⑤) 葛飾北斎「富嶽三十六景 隠田の水車」1831-1833年 東京国立博物館所蔵  
(図⑥) 葛飾北斎「東海道五十三次 川崎」1802年 ボストン美術館所蔵  
(図⑦) 葛飾北斎「富嶽三十六景 駿州大野新田」1831-1833年 東京国立博物館所蔵  
(図⑧) 歌川国芳「卯のだんごや」1841年頃 個人蔵  
(図⑨) 歌川国輝「江戸名所 高輪の月見」1847年 神奈川県立図書館所蔵  
(図⑩) 『近世祭礼・月次風俗絵巻』「都名所図巻」江戸時代前期 個人蔵  
(図⑪) 狩野永徳「洛中洛外図屏風 上杉本」国宝 紙本金地着色 1565年 六曲一双  
米沢市上杉博物館所蔵  
(図⑫) 雪舟「四季山水図 秋」年代不詳 ブリヂストン美術館所蔵  
(図⑬) 葛飾北斎「金沢八景」年代不詳 個人蔵  
(図⑭) 歌川広重「武陽金沢八勝夜景」大判錦絵 1857年 個人蔵

- (図⑯) 葛飾応為「吉原格子先之図」1818-1844年頃 太田記念美術館所蔵
- (図⑰) 鈴木春信「夜の梅」1766年 メトロポリタン美術館所蔵
- (図⑱) 歌川国貞「月の夜忍逢ふ夜」1830年 個人蔵
- (図⑲) 鈴木春信「月のウサギ」年代不詳 個人蔵
- (図⑳) 歌川国輝「江戸名所 高輪の月見」1847年 神奈川県立図書館所蔵
- (図㉑) 歌川国芳「四季心女遊 秋」弘化期頃 日本浮世絵博物館所蔵
- (図㉒) 歌川広重「東都名所 日本橋雪」1831年 個人蔵
- (図㉓) 歌川広重「東海道五十三次之内 関」(隸書版) 1831年 個人蔵
- (図㉔) 喜多川歌麿『吉原青楼年中行事 良夜之図』年代不詳 個人蔵
- (図㉕) 歌川国芳「東都名所 新吉原」天保年間 大英博物館所蔵
- (図㉖) 土佐光起『源氏物語画帖 朝顔』1509年 個人蔵、ハーヴァード大学美術館所蔵
- (図㉗) 楊(よう)洲(しゅう)周延(ちかのぶ)『吉野皇居月見御筵之図(ぎよえんのす)』年代不詳 国立国会図書館所蔵
- (図㉘) 歌川広重「名所江戸百景 永代橋佃しま」1856-1859年 国立国会図書館所蔵
- (図㉙) 歌川広重「名所江戸百景 虎ノ門外あふひ坂」1856-1859年 国立国会図書館所蔵
- (図㉚) 歌川広重「銀世界東十二景 隅田川両川岸一目の月」年代不詳 個人蔵
- (図㉛) 歌川広重「月に雁」1830年頃 個人蔵
- (図㉜) 住吉廣行「月に雁」年代不詳 森宮古美術所蔵
- (図㉝) 歌川広重「東海道五十三次之内 蒲原 夜の雪」1831-1834 江戸東京博物館所蔵
- (図㉞) 歌川広重「東海道五十三次之内 石薬師」(行書版) 1831-1834 江戸東京博物館所蔵
- (図㉟) 歌川広重「東海道五十三次之内 藤枝」(隸書版) 1831-1834 江戸東京博物館所蔵
- (図㉟) 歌川広重「京都名所之内 祇園社雪中」1834年 個人蔵、江戸東京博物館所蔵
- (図㉟) 歌川広重「木曾海道六拾九次之内 長久保」1835-1842年 江戸東京博物館所蔵

(<sup>1</sup>) 北斎が門人や北斎画の愛好者、浮世絵関係の職人、他の画家たち、広くは江戸の庶民をも含めた多くの人々のために描いたデッサン集。絵手本は絵の描き方等が書かれているだけでなく、美人画や人物画、花鳥図、風景画等も描かれており、絵画作品の一つとも捉えられる。

(<sup>2</sup>) 内藤正人『アート・ビギナーズ・コレクション もっと知りたい歌川広重 生涯と作品』に拠る。

- (3) 平安、鎌倉時代の屏風障子絵において、月次絵、四季絵と並び、これらと組合わされて愛好された画題。歌枕などで知られた諸国の名所を選び、季節感や人事などを盛込んで描き連ね、和歌と合せて鑑賞された。流行は平安時代中期(10世紀)に始まる。大嘗会の饗宴に用いるやまと絵屏風も、悠紀、主基の国郡内の地名にちなむ儀礼化された名所絵であった。さらに中世以後、名所絵の伝統は絵巻物などに継承され、近世初期の『洛中洛外図屏風』も描かれる。後に北斎、広重により「風景画」と呼ばれる、「景色」を主とした作品が誕生する。
- (4) 自然を題材とした東洋絵画の一部門。人物画、花鳥画とともに東洋絵画の三大部門で、一般的には風景画の意味に解釈されるが、高い精神性が要求される。大自然を意味する山水は道教思想、陰陽五行説などを背景として画題として取上げられた。日本へは、7~8世紀に中国の山水画の直接的な影響のもとに発生発展したが、9世紀末から独自の展開を示した。
- (5) 赤瀬川源平『赤瀬川原平の名画探険 広重ベスト百景』(P.12)は「広重は夜景を好んでいた。」「広重は夜景を好んで描いている。何れも傑作である。夜景を好んでといったが、広重は雨景も、雪景も、水景もみんな好んで描いている。」と述べているが、広重がどれほどの数の「夜景」の作品を描いたのか、その作品数を図や表でまとめたものや、「夜景」にこだわり長年にわたり、多くの「夜景」を描いたのは、広重だけであるといったこと、夜の山や夜の雨、夜の雪を描いたのも広重のみであること、年代ごとに広重の「夜景」作品を分類し、「夜景」の描き方の特徴や変化等については、どの浮世絵研究者も、論及していない。
- (6) 『古今和歌集』に、春の夜の梅についての歌が詠まれている。
- 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる 『古今和歌集』
- 卷1 春歌上・41 凡河内躬恒
- (春の夜の闇は、わけのわからないことをする。梅の花は闇が隠しても、色は見えないかもしないけれど、香りは隠れるものか、いや、隠れはしないのだ。)
- (口語訳は奥村恒哉『新潮日本古典集成(第19回)古今和歌集』に拠る。)
- (7) 江戸時代から後期に流行した、絵入りの小説本。各ページに挿絵があり、本文は平仮名で記された。
- (8) 大判錦絵を縦に、2枚継ぎ合わせて1図としたもの。これに簡略な、表装をほどこし、床や壁を飾る掛物として、販売された。幕末に、庶民の間で流行する。地方への土産物としても人気があった。